選考委員特別賞

いまたち

千葉県東金市　森　周章

中学に入って二度目の冬、父に会うのは裁判以来初めてだった。

電車の窓からは工場地帯の大きな煙突が見えた。五井という駅で降り、ロータリーに出た。客待ちのタクシーが数台。後ろの運転手は昼寝をしていた。父は僕を見つけて近付いて来て訊いた。「こんなことをして母さんはいいのか」日焼けした顔に眼だけが光っている。「あの人は研究でヨーロッパだよ」「あの人なんて言うなよ。母親だろう。お前は叔母さんのところか」「逃げ出してきた」。終業式後、父に電話して詰襟の制服にコートをはおってやって来た。「居づらいのか」と訊かれて、首を横に振った。「優しいよ。中学に入ってからはずっと」「名門だからな。世間の見る目も変わっただろう。帰りな」「いやだ。父さんと暮らす。釣りの弟子になる」「バカ言うな。お前はもう列車に乗ってるんだ。飛び降りると大怪我をする。終点は分からないが、そこそこエリートの人生が保証されている。そのために受験で苦労したんだろう。それに俺には金がない。お前を引き受ける余裕はないんだ」「学校は公立に移る」口を尖らせた。「そう早まるな」父は片頬を歪めた。離婚裁判で職業を訊かれて、父が「自由業。釣り関係の仕事をしています」と答えたときより、さらに痩せていた。「叔母さんは知っているのか」と父は訊いた。首を横に振ると父は叔母さんに電話をかけさせ、出ると代わって「しばらく預かりますが、正月前には帰らせます。スミマセン」と自分が悪いことでもしたように何度も謝り、切ると「年末までだ」と言い放った。

古い軽自動車の助手席に乗り込んだ。「引き合わせたい人がいる。挨拶ぐらいしとかないとな」運転席の父が言う。「オンナの人？」「お前がそんなことを訊くようになるとはな。女と言えば女だが」父には愛人がいると母は言っていた。引き留めるための嘘だと思った。そのオンナと暮らすのだろうか。車は橋を渡って、川沿いの道路を走った。護岸に釣り人が見える。横道に入り、立派な門構えの屋敷の前に止まると、車から降り父は門柱のチャイムを鳴らした。

「誰だい？」インターフォンから聞こえてきたのは、確かにオンナの声だが掠れていた。「婆さん、俺だよ」「ダイスケか。やっと家賃を払いにきたのかい」「ちょっと話があってさ」。しばらくすると門扉の鍵を開け、おばあさんが出てきて僕を一瞥した。「大家さんの千春婆さん。これ息子の翔太」腰を折り曲げて、中学受験予備校の面接作法で教わった通りの礼をした。屋敷の居間に通され、僕は正座した。父は勝手に台所から缶コーヒーを持ってきて開けて飲み、あぐらをかきながら嘘も交えて説明した。千春さんは「するって言うと大学の先生のカミさんが用事で、年末までこの子を預かるのかい」と確認するように聞いて僕を見た。「あんた、どこの中学だい」僕は学校名を伝えた。「へぇ、いい学校だね。私が華族女学校系の学校の女学生だった頃、そこの学生に慕われてね。華族って分かるかい？　イエの家族じゃないよ」「爵

位を持っていた人とその家族ですね」「さすがに優秀だね。栴檀(せんだん)は双葉より芳し。ダイスケとは大違いだ」父は缶コーヒーをテーブルに置いた。「そんな古臭い表現、知らんだろう」「天才は子供の頃から優れている。学校で習ったよ」答えると、千春さんはそれ見たことかという顔つきで父を見た。「でも、腑に落ちないね。カミさん、あんたに預けたら裁判で不利になるんじゃないの」僕と父は顔を見合わせた。千春さんは腰に手を当てて立ち上がった。「まあ、美少年が一緒なんだから、あたしはいいけどね」

父の家は千春さんの屋敷の裏隣だった。玄関には、釣竿が何本も立てかけてある。「タブレットはあるが、テレビはない」父は家のなかを案内すると、居間の炬燵に入って横になった。「華族女学校系なんて嘘っぱちだな。一人暮らしの孤独な老女。初めは茶飲み友だちだったんだが、いまではまるで使用人。車借りたら運転手だ。用事があるとラインで知らせてくる。さて、俺は今晩も仕事、夜釣りだ」。

父が釣りに出かけてしまったので、僕は一人で歩いて川岸に出た。標識に養老川とある。のんびりとした名称と対岸に並んだ工場は不釣り合いな気がしたが、建物のオレンジや白の照明は川面にアートのように反射していた。こうして父との日々が始まった。

数日経った昼過ぎ、千春さんから〈話がある〉とラインが入ると「俺はいないと言えよ」と父は居留守を決め込んだ。千春さんが来ると僕は「父は外出中ですが」と言った。千春さんは玄関口から、よじれた布団を見た。「あんた、本当にいいとこの坊ちゃんだね。チチはガイシュッチュウなんて、このあたりじゃ誰も言わないよ。そうかい。家賃の催促じゃなくて、おカネになる話を持ってきたんだけど、よそにまわすかね」。ガタッと奥から音がした。「あ、戻っていたようです」。父は出て来て上がるように勧め、千春さんは炬燵に入って訊いた。「あんた、ワカサギ、これまでで一日にどれくらい釣ったことがある?」「年によって違うけど……十六かな」「十六匹?」「なわけないでしょう。百匹で一束(そく)で、十六束」「だったら千六百と言いなよ。紛らわしい」千春さんは口を尖らせた。「大きさは?」「最高で十五センチ。五寸と言った方がいいかな」「あたしだってセンチは分かるよ。まあそれだけ釣れるなら腕は確かだね。あたしの府立第一高女の学友がさ、釣り師を探していてね」華族女学校系だったのではと思ったが、黙っていた。千春さんは続ける。「これまでに名人やらに頼んだんだけど、みんなダメだったんだとさ」「何をするんですか」父は顔をこわばらせた。「やり手の医者の息子より、沢山釣って欲しいんだってさ」「釣るだけなら……。でも何で?」と父は訊いた。「知らないよ。東京だけどまずは挨拶だね。この子を連れてね。相手は病院の院長先生の未亡人で、上流階級だからね。あんたみたいながさつな店子(たなこ)が一人で乗り込んだら、私が恥かいちまう。謝礼は二桁かな」。二桁と聞いて、父はほくそ笑み、「ラッキー」と呟いた。

千春さんの学友の住まいは病院の隣の古い屋敷で、和室に通されると夫人が背筋を伸ばして正座していた。「当家は旗本の出で

ございまして、津軽の采女にも連なります。釣りをなさるのなら、采女はご存知でしょう」正座をしている父は目を丸くした。夫人の顔がかすかに曇る。父は一呼吸おいてから口を開いた。「いやー驚きましたね。あの江戸の釣り指南書、『何羨録』の津軽采女の末裔とは。私も時々ひもといております」父の書斎と言うか物置には山のように釣り本があるが、どの本にも線や書き込みがある。「古本で前の持ち主の書き込みだ」とそっけないが、筆跡は父のものだった。昔から賢いのかバカなのか分からない。「手前の主人も『何羨録』を愛読してまして、とりわけ序の終わりを好んでいました」と夫人が話すと、父は「釣り人には外面的な利益、名誉などはどうでもよい。内面では生涯を淡泊とし、物事に執着せず、無心に、しばしばうるさいこの世を避けること。なかなかできませんが」と頭を掻いた。

「ワカサギはお釣りになりますよね」夫人は父を見た。「ええ、もちろん」「食べるときは？」「天ぷらですね。新鮮なら味は抜群」「主人も大好物でした」夫人は棚の引き出しを開けて、和綴じの「公魚釣り秘伝」と手書きされた冊子を渡した。「こちらに書いてある通りのやり方で、主人の竿と釣り方でワカサギを釣っていただきたいのです」父は神妙な顔をして肯いた。夫人は床の間に立てかけてあった細長い漆塗りの木箱を父に渡した。中には六組の竹竿があった。父は一本を取り出し穂先をつなぎ、竿を振った。「見事な和竿ですな。毛バネ用だ」「主人がワカサギ釣り専用に用意したものです」父は僕に竿を手渡した。「この穂先は鯨穂だ。鯨の髭。なかなかお目にかかれないぞ」。そのとき廊下を人が渡ってきた。

「母さん、いいかげんにしてくれよ……」白衣の中年男が襖を勢いよく開けた。「お騒がせして済みませんね。息子です。院長をしてますの」夫人が僕たちを紹介すると、院長は父を睨んだ。年恰好は五十前で、背が高く、目つきが鋭い。「あなたで五人目。名人、プロでも、その竿じゃ話にならなかった」「いいえ、この方はきっとあなたより上ですよ」夫人は息子の言葉を遮った。「無理だね。車代出すから、帰ってくれたまえ」院長はズボンのポケットから財布を取り出した。父の顔色が変わった。「釣り師は釣ってなんぼ。釣れなければ御代はいりません」貧乏を忘れたように父は澄まして言った。

院長は父に険しい視線を送ったが、ふと目をそらして僕を見た。というか、学生服を見て訊いた。「きみは付属の生徒か？」学生服の金ボタンで分かったらしかった。「男子校の方です」と答えた。その私立大学の付属には共学校もある。「学ラン変わらないな。中学から？」「ええ」「私もそうだ。受かったときは嬉しかったなァ」表情が緩み、夫人もほほ笑んだ。「最近、コートはそれなのか」院長は傍らのコートを見た。「ダッフルが多いです」と答えると、院長は母親をちらりと見た。「私の頃はトレンチだった。ねぇ母さん」「ええ、それも猫も杓子もカーキー。あなたもおねだりした」と夫人が和やかに答えた。「いい学校だった。変な先生が多くて、少しバンカラで。レベルも高いが、授業料もバカ高い」と院長は苦笑した。「高校まで通ったよ。成績も医学部への内部推薦に手が届くところだったが、受験に切り替えて国立の医

学部に進んだ。私立の授業料を払う金がなくてね。オヤジは釣り道楽で、始終、臨時休業。徹夜の釣りの後の手術ミスで膨大な慰謝料を払って経営は火の車。高二のとき、心筋梗塞で死んでしまった。医者の不養生とはよく言ったものだ」「もう三十年になります」夫人が口をはさんだ。「家庭も仕事もほったらかして、釣り道楽で身を持ち崩したダメ人間、人生の落伍者だ」

院長の言葉に、僕は思わずくすりと笑ってしまった。「何がおかしい」と院長は口を尖らせた。「すみません。でも昔、母が父に同じようなことを言っていたから」父は黙るよう目配せしたが、僕はかまわずに続けた。「でも、その頃は仲はよかったんです……」不仲になったのは数年前、大学に欠員ができて非常勤から運よく母が常勤になってからだった。「離婚裁判中で、こいつは普段は母親の所にいるんですよ」父は小声になった。「でも僕はお父さんと暮らすことに決めたんだ。今度、裁判に呼ばれたらそう言うよ」「俺はいいって言ってないし、裁判官が認めるとは思えない。釣りで生活しているんだ。お前を養えるわけないだろう」「お金がいるなら働くよ。中学だって公立に移る」「ばかを言うな！」あやうく親子ゲンカになりかけたが、夫人は院長に「独り身だと分からないわよね」と囁いた。院長はきまり悪そうに腕時計を見た。「診察があるんで失礼しますよ。勝負するなら木曜の午後。場所はどこにします？」院長は幾つかの湖の名前を挙げた。「できれば高滝湖で」と父は返事した。「いいですよ。近くていい」二人は、釣れた数で勝負と対戦ルールを決めた。

「私も立ち会います。場所はどちらですの？」夫人が口を開いた。「市原だよ」と院長は答えた。「あらまぁ、あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方ですね」と夫人はほほ笑んだ。「そうです。住んでいると、あやしくなってしまう。チハ……」と言って、父は口をつぐんだ。千春さんと言いかけたらしい。僕は話が呑み込めずにいた。院長が口を開いた。「更級日記。都から東国への道の果てよりも、さらに奥の田舎……」「そうだが、あづま路の果てというのは常陸、いまの茨城県だけどね」と父がいう。「ばかな。常陸の方が遠いではないか」院長が反論する。「頭が硬いな。宇治十帖の浮舟はどこで暮らしていましたか」と父が訊くと「常陸です」と夫人が即答した。「紫式部も常陸と縁が深く、都の人も上総より常陸に親近感をもっていた。それに比べると上総は奥。距離や方角で考えるのは現代人の発想」父の言葉に夫人は肯いた。院長は憮然と出て行った。

「古典にお詳しいんですね」と夫人が水を向けると「いや、ぜんぶ耳学問ですよ」と父はそっけない。本当は昔、高校で古文を教えていた。「何で息子さん、あんなに自信があるんですか？」と父は訊いた。夫人は小棚から釣り雑誌を持ってきて「大会ではたいてい優勝しているようです」と言って、院長が電動リールを手にワカサギをズラリと釣った写真を見せた。帰り際に僕を先に車に乗せて、父は夫人と話し込み、戻ってくると「参ったな」と珍しく弱音を吐いた。

車は埋立地を走った。「さっき、千春さんと言いかけたでしょう」と訊いた。「ああ、あやしい田舎者の代表だ」「いかばかりかあやしかりけむをもって、作者のこと？」僕はスマホで調べた更級日

記の一節について訊いた。「出身じゃないが父親が行政官で十歳から十三歳までを過ごした。それでちょっと自分を卑下したんだな。実際に書いたのは五十過ぎだから、当時としては高齢だ。知人は亡くなるし、孤独で誰にも相手にされない、姥捨ての心境だな。千春婆さんみたいなものだ。まあ、あの婆さんにそんな繊細さがあるとは思えんが」。帰り際に父は、道路の中央分離帯にある作者の像や居住地跡と言われるところを車で回り、家に戻ると本棚の奥から古い本を取り出して来て「読むならネットでなく紙で読め」と手渡した。

翌日の昼、初めて高滝湖に連れて行ってもらった。ダムで川を堰き止めてできた湖だ。養老川が流れ込み流れ出ているが、水流は目では分からない。坂を下りて左手の駐車場に父は車を停めて、事務所への階段を降りて行った。目の前は湾で桟橋が並び、その三基の先端にはかまぼこ型のビニールハウスのような固定の桟橋ドームがある。父は遊漁券を買って戻ってきた。車は湖岸に降りて、赤い鳥居の前を右に曲がった。釣り人はまばらだった。岸で黒服の初老の男が長い竿を揺すっている。父は車を停めて降り、男と談笑しながら脇に荷物を置いて準備をして「こちらのオカッパリ大名人オブチさんに教えてもらえ」と竿を僕に渡して、車で走り去った。

やっと釣りができる。昔、親子三人でよく釣りに行った。父がモンスターペアレンツに追い詰められて高校を辞めてしまうまでのことだ。辞める直前、父は大物の黒ダイを釣り上げ自分の天職は釣り師だと悟ったという。そう裁判で言うと失笑が漏れた。母との家庭内格差が拡がり、父は家を出て、僕は受験があって釣りを封印した。

エサを付けて、仕掛けを水の中に入れて上下させる。手元に振動が伝わる。アタリだ。ゆっくりと持ち上げると、湖面にワカサギの銀色が一閃した。久しぶりの一匹に興奮した。オブチさんは黙々と釣り上げていく。僕も何匹か釣れた。長い仕掛けの上の方に掛かると、竿を後ろの柵に立てかけて岸の段を上って外した。「やっぱりキミか」と後ろから声がした。上針のワカサギを外して、振り返ると、院長が船尾のエレキという船外機を操って、近くに静かにボートを付けた。「もしかしたらと思ってね。下見には今日しかない。お父さんは？」「どこかに行ってしまったんですよ」「ボートでは見かけなかったな……見落としたかな」。オブチさんがこちらを見た。「ボートはないね」「なんで？」と院長が訊くと、オブチさんは口から物を吐くポーズをした。「本当？」と院長がこちらを向く。僕は首を傾げた。「重症だよ。桟橋でも酔っちまう」オブチさんは笑った。「言ってくれれば……」院長はボートを動かし遠ざかった。

「完全装備。電動リールも高級品。穂先は特注だな。あんなの昔はいなかった」とオブチさんは話し始めた。十数年前は電動リールは珍しかったが、大手メーカーが開発に乗り出し急速に普及したという。それでも手巻きリールも多いし、魚が掛かると糸を手で手操る古くからの手バネにこだわる人も少なくないがいる。父も手バネの筈だ。「電動と手バネ、どっちが釣れるでしょうか」

と聞くと、「状況によるね。活性が高いと電動だが、ここは水深が四、五メートルと浅いんで、手バネでも勝負になる」と返事が返ってきた。

風が出て湖面が波立ち始めた。父のことが気になった。オブチさんに釣り具を頼み駐車場に向かうと、事務所脇の水道で父が顔を洗っていた。桟橋ドームで吐いたようだ。吐瀉物を組合のおばさんと始末し、父はポケットからビニールに入れたワカサギを取り出し、寄って来たブチの野良猫の前に差し出した。猫は素早く父の手の甲を引っ掻いて、獲物を咥えて逃げた。「やるのに引っ掻きやがって」と父が怒ると組合のおばさんが笑った。僕は静かにその場を離れた。

その日、釣ったワカサギを千春さんへ渡すと、代わりに父は夫人からの段ボールを受け取った。それから三日間、僕はオブチさんの隣で釣り、父は消えた。ドームでの修業は隠していた。

対決の日がやってきた。晴天で湖面は凪いでいる。僕たちは二手に分かれてボートに乗り込み、沖のロープの釣り場で向かい合った。僕は院長と、夫人は父と一緒だった。「そろそろ始めますか」と院長が声をかけると、「待ってくれ！」と父はダウンのコートを脱いで夫人に渡した。父の姿に院長は一瞬、目を見張った。上が黒、下が緑の古いアノラックを着て、羽織ったライフジャケットも、高級そうだが古い。院長の唇がオヤジと動いたように、僕には見えた。

夫人がストップウォッチを片手に号令をかけ、二人は釣り始めた。父は竿を右、左と順番に大きく斜めにしゃくり、それから穂先を下ろして細かく振動させ、左の竿を少し上げた。最初の一匹がかかったらしく、竿を大きくあおり、網引きのポーズでするすると両手で道糸を巻いて仕掛けを上げて魚を外し、また水の中に落した。院長は唖然として一連の淀みない動作を見ていたが、すぐに自分の釣りを始め、左右の置き台で細かく竿先を上下させ、アタリがあるとボタンを押してリールを自動で巻き上げた。二人とも片手で魚を外し、エサ付けも素早い。驚いたことに、穂先が動いたかどうかも分からないうちに竿を上げて、どんどん釣り上げ、空振りがほとんどない。途中で院長の右手の穂先が大きくしなった。院長がすばやく道糸をつかんで右左に動かすと、道糸が急に弛んだ。「ニゴイだな」と院長は呟いた。夫人が一時間経過を告げた頃から、二人とも釣れるペースが落ち始め、エサの付け替えが頻繁になった。どちらも一心不乱だったが、時々ちらちらと相手の釣りを見て、微妙に誘い方を変えているようだった。院長の巻き上げよりも、父の手操りの回数が遅れ、少しずつ差がついているようだった。父の方にも何か大物が掛かった。父は道糸をつかみ、魚の走りに合わせて右に左に手を動かしながら少しずつ手繰り上げ、水面近くで一気に抜き上げた。中型のブラックバスだった。父は針を外し、そっとリリースした。院長は手を休めて口元に笑みを浮かべ、数回拍手を送った。

二時間を過ぎると、風が吹き始めた。院長は向かい風で不利になったが、顔色一つ変えない。父の方は、船体が揺れ始めたのが気がかりだった。釣り上げると時々手首を振り、少し息が荒くなっ

ている。ボートが揺れるためなのか、父の姿が長い周期でゆっくりと上下し、無意識に動いているように見えた。それでも何かに憑りつかれたように釣り続けている。父の上下動が大きくなり、深く激しい呼吸音が聞こえてきた。

院長は手を止めて、じっと父の動きを見ていた。父は下を向いて道糸を手操っていたが、魚を外そうとした瞬間、首を折るように前のめりに倒れた。「父さん！」と僕は大声をあげた。そのときに院長も「オヤジ」と叫んだ。ボートが傾き、父は頭から水の中に落ち込みそうになったが、「あなた！」と叫んで、夫人が父を後ろから押さえて、仰向けにひっくり返した。ボートが大きく揺れた。院長は自分のボートを横づけして素早く父のボートに乗り移り、父の首をのけぞらせるように押さえ、胸に耳を当てた。真っ青な顔で意識はないようだったが、息はしていた。院長は夫人に救急車を呼ぶよう頼み、僕にエレキの動かし方を指示し、ボートを岸に向かわせた。

救急車で、父は近くの県立の循環器専門病院に運び込まれた。幸いすぐに意識は戻った。吐かないよう我慢していて失神したらしかった。検査を受け、僕は付き添った。検査の合間、父はバツの悪そうな顔をしながら「完敗だったな。歯が立たなかった。でも、これで勝負も御破算だな」とウインクした。

しかし、勝負は御破算にはならなかった。検査結果に問題なく夕方に病院を出た僕たちは、院長の車で千春さんの家に集まった。ダイニングキッチンのテーブルにワカサギを入れたバッカンが並べられ、夫人と千春さんが数え始めた。父は居間の炬燵の中で寝そべって「数えるまでもない」とブツクサ言う。数え終えた千春さんと夫人が入ってきた。千春さんが院長の釣った数を三百四十三匹と告げた。父は不審な表情になって顔を上げた。夫人が次に「ダイスケさんは三百九十二匹」と言うと、父は飛び起きた。「まさか。勝った？数え間違いじゃありませんか」「二人で交代して二度数えたので間違いはありません」と夫人は断言した。「勝った。おい翔太、勝ったぞ」「すごい！」僕は叫んで院長を見た。院長は覚悟していたかのように「負けました。大差ですね」と素直に口にした。

結果を確認すると「疲れたんで休みます。翔太は御馳走になれ」と父は立ち上がった。玄関先で「お礼を……」と札入れを取り出した夫人を、父は手で押し留めた。「報酬はお借りした竿でいかがですか。ついでに椿油をつけてもらえると、ありがたいです」「それだけでよろしいんですか」「ええ、すばらしい竿で、もう自分の一部になったようで、別れがたくて」「分かりました。差し上げます」言われて父は、玄関先に置いた和竿の木箱を手にした。「椿油は、後で千春さん宛にお届けします」と夫人は深々と頭を下げ、「これであの子もケジメがついたでしょう」と嬉しそうに謎の一言を付け加えた。

僕は家まで父に付き添った。「おカネじゃなくてよかったの？」訊くと、父は木箱の和竿を見せた。「みんな貴重品だ。間違いなく昭和の伝説の和竿師、波乃孤舟の竿だ。剥げかかっているが竿尻に書いてある。孤舟の竿、しかも珍しい竿だ。中古でも一本二、三十万は下らないぞ」父は上機嫌だった。「でも、よく勝てたね」

「釣りは最後まで、分からんな。だめだって思ったんだがな」「少し変……院長さん、あっさりと負けを認めて、悔しそうじゃなかった。それに倒れた時にオヤジと叫んでいた」父は視線を落とし「俺は旦那になり切る覚悟でウェアも借りたからな。夫人に聞いたんだが、旦那が発作で倒れたときに院長も一緒だったらしい。反抗期で成績も上がらずイラついていた息子を、釣りに誘うよう夫人が頼んだそうだ。それで無理して出かけて倒れた。夫人は今でも悔いている。でも院長は言うほどオヤジを憎んでいないね。医者で、しかも釣り名人。同じじゃないか。いくら否定しても父親を目標にしてきたのさ」

ラインに釣りたてのワカサギのから揚げと天ぷらができたと知らせがあって、僕は屋敷に戻った。にぎやかな食事を終えて女性二人が台所でお喋りを始めて、僕と院長は居間の炬燵に移った。「ワザと負けたんじゃないですか」と僕は小声で訊いた。「さあね」と院長は横を向き、意を決したように話し出した。「キミも色々あるようだけど、付属に入っただけで絵に描いたような幸せが待っているなんて思ってないよね。これからも山あり谷ありだ。今日、改めて思い出したよ。オヤジを亡くしたことへの怒りが、自分の原動力になった」。さらに院長は声を潜めた。「キミたち親子に出会って、オヤジにあって自分にないものが分かった。ちょっと羨ましくも思ったよ。それと実は……」院長は言いにくそうに俯いて続けた。「負けたら身を固める約束なんだ。この歳で婚活だよ」僕は目を丸くした。「お父さんには内緒にしてくれよ」と院長は照れくさそうに笑った。

翌々日、椿油が届いたという知らせを受けて、父と僕は千春さんの屋敷に出向いた。「なんだい、こんどの稼ぎは油に化けちゃったのかい」大きな木箱の上の配達表の油という表示を千春さんは見た。父はその場で木箱を開き、赤茶色の一升缶を取り出し「ほい。椿油だよ」と千春さんに渡した。千春さんは栓を開けて、指を入れてなめた。「まろやかな甘さだね。風味もある。あー、懐かしい。間違いなく伊豆大島の椿油だよ。思い出すね。主人とよく行ったんだよ。おや、十缶も入っているよ」千春さんは木箱を開いて数えた。「ばっちいな、指入れて。それやるよ」「いいのかい。ありがとう。でも何でこんなにあるのさ」「和竿の手入れに使うんだ。少しでよかっただけど」「一缶、七千円は下らないね。十缶で七万……」「ふうん」と父は肯いたが、波乃孤舟の竿が頭の中を占めているようだった。

「おや手紙が入っているよ。読んでいいかい?」と千春さんが聞いた。父は肯いた。千春さんは手紙を取り出し読み上げた。「〈主人が作った和竿を末永く大事にお使い下さい〉だってさ。だからこんなにたくさん油を送ったんだね。おや、ダイスケどうした。顔色が悪いよ」父は手紙をひったくって、和紙の便箋に目を走らせた。「波乃孤舟じゃなかった……」とまで言って、父は絶句した。

翌日から何日も僕は父と高滝湖に通い、岸で釣り糸を垂れた。釣れる日もそうでない日もあったが、父は僕の何倍も釣った。年末が近づくと父は不機嫌になった。最後の日、一人で行けと父に言われて、鉄道マニアに人気のローカル線で高滝湖に行った。あ

まり釣れず、僕は早上がりをして列車に乗り、途中の馬立(うまたて)駅で降りた。小さな駅舎のベンチに腰を下ろして、父が貸してくれた本を取り出した。京に帰る一家が最初に泊まった場所は「いまたち」という。父が黒鉛筆でその箇所に「馬立の聞き違いか」と記していたのが気になっていた。千年前の作者は本当にそう聞き違えたのか。一家の住まいからは南で京とは逆方向だが、父のメモによると最短で行くことをはばかったらしい。父のメモは続く。「いまたち、いま立つ。新しい世界への出立」。作者は自分の旅立つ思いを地名に託したのか。冷たい風が吹く駅舎で考えても、何の結論も出そうになかった。ただ、子どもの世界から離れて、新しい独自の世界に向かう、そのとば口に立っていることは自分も同じ気がした。クリームと赤の二色の列車がやって来た。僕は五井に戻った。ワカサギを持って千春さんのところに別れの挨拶に行った。頭を下げると「また遊びに来なよ。死んでしまう前にね。春は菜の花と桜が一緒に楽しめるよ」と千春さんは涙ぐんだ。僕は言葉に詰まって、何も言えなかった。

家に戻ると父はいなかった。代わりに母が玄関脇に立っていた。「家を出たって聞いてホントにびっくりして、飛んで帰ってきたのよ」母は早口でまくし立てた。「父さんは？」僕はそっけなく訊いた。「あっちの方に竿を持って行った」と母は指差す。僕は護岸に向かった。母は言いたいことを我慢している様子で、後から黙ってついて来る。護岸に出ると、川面には夜釣りを始めた人々の電気浮きが点々と光っていた。端で父を見つけた。「まだいたのか。母さんと帰ればいい」父は竿を上げて、母と目を合せず帰り支度を始めた。「昔、こんな河口でシマダイ釣ったよね」と僕は思い出しながら二人に話した。幼い僕が、白と黒の縞模様のシマダイを釣り上げたのだ。手の平サイズ。「翔太すごい！」と母が叫び、父が針を外して「記念すべき一匹」と僕に手渡し、母が手を伸ばしてスマホで三人と一匹の写真を撮った。飼いたいと僕が言い、母も飼いましょうよと加勢したが、父は「水槽じゃ窮屈。大きくなって帰って来いと言って、リリースしてやれ」と顎をしゃくった。護岸からそっと手離すと、魚は落ち葉のようにゆらめいて落ちて、水面に達すると勢いよく泳いで波間に消えた。「イシダイになるんだよね」と聞くと父は「そうだ。磯の王者だ。縞模様も消えて七十センチにもなる。長生きだから、次に会うときはお前も立派な大人かもな」と答えた。

話し終えると「そんなことあったか」と父は小首を傾げ、荷物を肩に歩き始めた。母はスマホを取りだした。三人は微妙に距離をとって護岸を歩いた。「魚を釣っているのか、魚に釣られているのか、この頃分からなくなる」父は声を落とした。「釣れば釣るほど、魂を釣られてしまってんじゃないか」父は下を向いて先を行く。「見つけた。これでしょう」母が突然、スマホの写真を見せた。三人と一匹。「シマダイ笑っている」と僕が言うと、「本当か？」と思わず父は振り返り、「ダマしたなァ」と苦笑した。母も少しだけ笑った。

（了）